

現在日本には110の活火山があり、うち47火山については、気象庁による常時観測の対象となっており、大分県では鶴見岳・伽藍岳と九重山が常時観測火山となっています。

また九重山は、噴火警戒レベルが運用されている全国30火山のひとつでもあります。

鹿児島県の桜島など、現に活発な活動を繰り返している火山に比べ、日頃特に異変もないぶん意識することも少ないのですが、噴火の可能性のある火山がすぐそばにあるのは、まぎれもない事実なのです。

M9クラスの地震後数年内に、近くで火山の噴火が起きた事例は世界中に見られ、2004年スマトラ島沖巨大地震の際も近隣3火山が噴火しています。東北地方太平洋沖地震後、国内では地震に誘発された噴火は起きていませんが、数年内は地震に影響された噴火の恐れがあるといわれています。

突然起こる地震と違い、火山噴火の場合その多くは火山周辺での地震の増加や地殻の変動といった前兆現象を伴う事が多く、これを事前に捉えることで、噴火警報や噴火予報が出されることになっています。

火山災害から身を守る重要な対策は、何よりも噴火前に避難することに尽きます。ひとたび噴火すると、噴火口からは火山灰や時には自動車ほどの大きさもある噴石といった碎屑物が噴き出します。また、山体を流れ下る溶岩のみならず、雲仙普賢岳で多大な犠牲者を出した火砕流が、数百度の熱風となって時速100km以上で駆け下ってくることもあるのです。これから逃れるには、何より早急に安全圏への避難が必要です。

適切な避難をするためにも、各火山ごとに作られた「火山防災マップ」や県・市町村の避難計画などで、事前に避難行動を考えておきたいものです。

近年の火山噴火では、その被害が火山周辺と極めて限定的で、活動が活発な火山を除き、その発生間隔も数百年と長いせいで、災害対応のイメージを持ちにくいかもしれません。しかし、日本ではこれまで100年間で5、6回のペースで大規模な火山噴火が起きてきました。一般的に火山の寿命は数十万年といわれ、たとえ噴火が起きても、火山の歴史からしたらそれはほんの一瞬の出来事なのです。噴火の間隔もまちまちで、今はおとなしくとも過去頻繁に噴火していた火山もあり、けっして珍しい災害ではないのです。